

(第5号様式)

学位論文審査の結果の要旨

氏名	中本 英里
審査委員	主査 胡 柏 副査 松岡 淳 副査 市川 昌広 副査 亀山 宏 副査 香月 敏孝

論文名 農業と医療・福祉の連携
ーひきこもり・ニート等の支援現場を事例としてー

審査結果の要旨

近年、若者のひきこもりやニート問題は大きな社会的関心事になっている。本来、学生または新生社会人として健常で活力に満ち溢れる「若者らしい」暮らしを送るはずだった若者が、様々な理由で社会から閉ざされた「無気力」の状態に陥り、本来発揮されるべき能力が発揮できず、本人やその家族だけでなく、将来社会のあり様にも影響を及ぼしかねない多大な人的資源の損失をもたらしているためである。その解決に向けたアプローチは多方面に行われているが、農園芸療法を含む医療福祉的アプローチと、若者の社会復帰を社会・経済の側面から支援する政策的アプローチが大きな柱となっている。本研究は、両者を組み合わせた農業と医療・福祉連携の視点から問題把握と解決策の解明を試みたものであり、第二章から五章まで構成される主な研究は、以下の通りである。

第二章は、4名のひきこもり者またはニート（心身不調のF氏、統合失調症のG氏、社会不安障害のH氏、適応障害のI氏）を対象に、農園芸療法を適用させた経過、活動過程、活動前後の効果評価を1年間にわたる詳細な観察と記録に基づき分析した。対象者の症状に応じた一連の農作業活動への継続的参加を基に得られた資料や対象者の自己評価をベースに、主治医と実施者がその効果を主観的側面（感覚、趣味、関心）と客観的側面（症状変化、睡眠、作業による改善確認等）から評価し、次に活かしていくプロセスが繰り返し実施される過程を克明に記録している。継続的な活動参加が体力づくり、感覚運動能力の向上、社会適応の改善等の効果が確認される一方、疲労や食習慣面での未改善ケースもあることを示した。

第三章では、1人の若年ひきこもり者を対象に、農園芸療法と実験社会科学的アプローチを融合させた実験実証的手法で考察、分析した。10か月にわたる30回の農作業活動を実施し、その結果を認知遂行、感覚運動、心理反応、社会技能の面から評価した上、実験社会科学で求められる感応性（実験効果の合目的性）、活動効果の非負性または単調性、合目的の優位性等を検証し確認した。対象者の臨時就労や進学意向等で示される「社会参加への移行」を果たす中で、主治医、園芸療法士、圃場提供者、実施者間の協働作業や対象者家族の協力が極めて重要であることも判明した。

第四章では、農の医療・福祉機能をさらに充実させるための条件整備面の課題として、愛媛県松山

市内の病院・診療所や「就労訓練の場」として位置付けられている全国の「地域若者サポートステーション」（サポステ）を対象に農園芸活動の導入状況と効果を考察した。病院・診療所へのアンケート調査では、8割の回答がひきこもり・ニート支援における農園芸活動の有効性を認識し、今後も継続または実施する意向を示した。全国のサポステへのアンケート調査では、回答の7割が農園芸活動の導入実績があることや医療・福祉・農業関係者間の連携のメリットと課題を示した。サポステにおける農園芸活動の事例分析では、活動経過後の就職、復職、障害者雇用等の実績が確認され、施設の人材確保、就職先確保、職業訓練面での課題を明らかにした。

第五章では、JAの取組を対象に地域農業における農業と医療・福祉連携に着目し分析を行った。全国667のJAから246件の回答を得た調査では、JAは若者雇用等多様な地域的課題に取り組んでいるが、ひきこもり・ニートへの取組は僅か2件にとどまっており、関心度や既存の取組への協力・関わりも極めて低いこと、その主な理由は職員教育、時間確保、および組合員からの協力不足にあることが明らかになった。取組のあった事例分析では、就労体験や就労機会の確保等におけるJAの間接的な関わりや、農地斡旋、作物選択、栽培指導等の面で協力可能であることが確認された。

以上のように、本論文は、ひきこもりやニートという、未来社会の活力・あり方にも影響を及ぼす極めて重要な課題に着目し、長い時間をかけて対象者と作業を共にしながらその経過と結果を具に観察、記録、評価し、学問的検証を経て仕上げたものである。現場と共にある研究姿勢や地道な作業によって多くの証拠が得られた点、社会科学の分野でまだ少数にしかない実験実証的分析手法を採用した点は高く評価される。研究成果の体系化やその政策的意味づけ、健全で活力ある地域づくり、社会づくりにおける本研究の位置づけ等の点で課題も残るが、学位論文として評価に値する結果が得られたと評価できる。

本論文に関する公開審査会は平成30年2月3日、愛媛大学農学部で開催され、申請者の論文発表と適切な質疑応答が行われた。引き続いて行われた学位論文審査会で本論文の内容を慎重に審議した結果、全員一致して博士（農学）の学位を授与するに値するものと判定した。